

東国千年の都

前橋・高崎の弥生時代 —— 2000年前の開拓者たち ——

前橋・高崎連携事業文化財展の開催について

数多くの史跡をはじめとした豊かな文化資産に恵まれた前橋・高崎両市は、その有効活用を図るとともにそれぞれの地域の特色や歴史を市民の皆様にご覧いただく機会として、平成19年度より前橋・高崎連携事業文化財展を開催し、今年度で7回目を迎えることができました。

『東国千年の都』と題し、各年度で古墳時代、縄文時代、中世など時代を変えて両市の文化財を紹介してきましたが、今回の展示は、稲作が伝来した弥生時代を初めて取り上げます。

弥生時代は稲作が始まり、新たに水田を切り開くことを試みた時代でした。両市の弥生時代の遺跡の変遷を探り、やがて花開く古墳時代の幕開けまで、どのように両市域が開拓されたかを発掘調査の成果を通して考えるとともに、選りすぐりの出土品を紹介します。

両市域の先人達の営みをふりかえることで、今後の両市の発展を考える契機になるとともに、両市の絆がさらに強くなると確信しております。

どうぞごゆっくりとご覧ください。



前橋市長
山本 龍



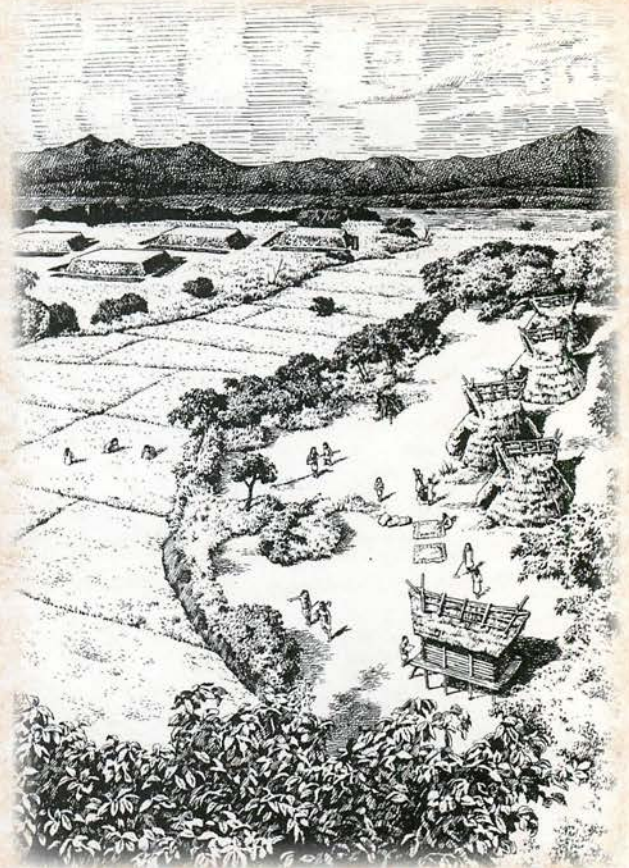
高崎市長
富岡 賢治

主催：前橋市・前橋市教育委員会、高崎市・高崎市教育委員会

後援：上毛新聞社、朝日新聞前橋総局、毎日新聞前橋支局、読売新聞前橋支局、産経新聞前橋支局、東京新聞前橋支局、共同通信社前橋支局、時事通信社前橋支局、NHK前橋放送局、群馬テレビ、エフエム群馬、ラジオ高崎、まえばしCITYエフエム等（順不同）

お米のある暮らし — 弥生人の生活風景 —

弥生時代は日本で米づくりが始まった時期だ。安定した収穫を得るための水田経営には多くの時間と労力を要した。粗起し〜耕作・代かき〜田植えor点播〜草取り・水管理〜収穫。鳥や害虫の被害を避けて、よく実って穂を垂れた稲の収穫には、ムラ人総出で当たり、長い時間と手間をかけて米を収穫した後は、今年の収穫のお礼と翌年の豊作を願う祈りをささげ、村々でマツリが行われたことだろう。



弥生時代のムラの様子(群馬県立歴史博物館提供)

弥生時代とは

弥生時代は、紀元前500年頃〜紀元後250年頃まで750年間(近年の年代測定法、較正年代比較法だと始まりは300年程遡る。)で、本格的な水田稲作農耕を行う食物生産社会へと転換の時代、金属の使用がはじまった時代、「イエ」を統合する「ムラ」が生まれ、やがて「クニ」と呼ぶ単位となった時代であった。水田経営は、多くの労力と水利の知識を要し、必然として指導・統率がうまれた。3世紀中葉、巨大古墳を造る王が現れ、ヤマト王権中心の「クニ」が成立する。

弥生時代は、土器の変化から大きく前・中・後・終末の4期にわけられる。縄文時代晩期の北九州に朝鮮半島から伝わった水田稲作農耕が、前期では全国に拡散する。中期は水田稲作農耕が安定し、土器の様相が一定範囲で共通し始め、集落→ムラ→クニへの統合が進む時期。後期は、土器の様相の違いからクニの範囲が明瞭になる時期。終末期は畿内で大規模古墳造営が始まり、群馬で前方後円墳や前方後方墳が造られる直前の時期である。様々な地域の土器が流入し、地域差が不明瞭となり、古墳時代前期の土器で統一されていくこととなる。

序章 弥生時代研究史

東京大学浅野地区(当時は向ヶ丘弥生町)から明治17年に出土した土器が、当時、厚手土器(縄文土器)や祝部土器(古墳時代の土器)とは違うとして、出土地名から弥生式土器と命名された。

群馬県の弥生時代研究

弥生土器の研究

杉原荘介さん(明治大学名誉教授故人)は、昭和14年、高崎市の竜見町遺跡や競馬場遺跡資料から竜見町式土器を提唱し、昭和30年代、県内弥生土器の大きな変遷を示した。山崎義雄さん(元群馬県文化財保護審議会委員・故人)は、昭和28年、高崎市倉渕町上ノ久保遺跡で、前期後半の土器群を明らかにした。県内古墳研究の先駆者尾崎喜左雄さん(群馬大学名誉教授・故人)は、昭和22年〜43年、高崎市倉渕町水沼遺跡で、後期の集落を調査し、堅穴住居覆土中の浅間C軽石層に注目する一方、前橋市の大胡金丸遺跡や荒口前原遺跡の調査で、県内の中期前半〜後葉の土器を明らかにした。昭和52年、井上唯雄さん、柿沼恵介さんが北関東弥生土器変遷の概要を示し、近年は若狭徹さんがより詳細な変遷を示している。

水田の発見

昭和40年代後半〜50年代前半、大規模開発で多くの遺跡が発掘調査された。関越自動車道新潟線建設に係る発掘調査では、昭和52年に高崎市日高遺跡で浅間C軽石層下から水田が検出され、一躍注目をあびた。その後、周辺から同時期の方形周溝墓や集落が検出され、後期の居住域、生産域、墓域の3点セットとなった弥生時代の集落景観が明らかとなった。

荒口前原遺跡(あらぐちまえはらいせき)

前橋市東部、荒口町にある。昭和32年、偶然の土器出土から群馬大学尾崎研究室が調査し、昭和44年の同研究室再調査では堅穴住居1軒を確認した。出土土器は、壺12、甕5、小型台付甕1、高坏1がある。いわゆる長野県地

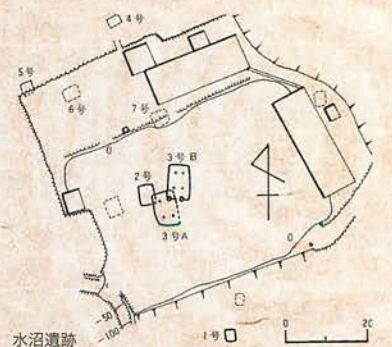
方の影響を受けた細描文を施す竜見町式土器を主体とし、東北地方南部の影響を受けた細描沈線で渦巻文や斜行線文を施す土器、両者の特徴をもつ土器が混在し、時期は中期後半とされる。同様な土器群は、同じ赤城山南麓地域にある粕川町西迎遺跡や荒砥北三木堂遺跡でも確認され、同地域に特徴的な土器群としてとらえることができる。



荒口前原遺跡出土の土器

水沼遺跡(みづぬまいせき)

烏川西右岸段丘上に位置し、県内で初めて弥生時代の集落跡の一部が発見され、後期樽式土器の壺・甕・高坏・鉢などが出土した。東部小学校(水沼小学校の前身)の農業実習地での土器発見から、関茂(倉渕村中学教諭)・尾崎喜左雄(群馬県師範学校教授)らが昭和19・22年に発掘調査を実施、1号〜3号A住居を発見した。また、昭和23年、尾崎喜左雄と群馬県師範学校史学部会員が、3号A住居の一部と3号B住居を調査した。なお、昭和42・43年にも発掘調査がおこなわれ、群馬大学学生や地元小・中学校生徒が発掘調査に参加した。



水沼遺跡

第1章 縄文時代晩期後半

— 遺跡の激減・何が起こったのか —

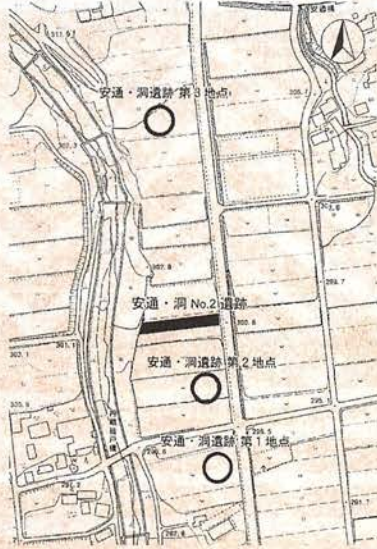
縄文時代晩期は、今から約3000年～2500年前にあたる。縄文時代後期から次第に気候は冷涼化し、晩期をピークとした。そのため、植生は大きく変化し、食料の多くを自然の恵みに頼る縄文人は大きな影響を受け、関東・中部地方では人口の減少が考えられる。前橋市・高崎市でも晩期の遺跡数は極めて少なく、人口の減少を裏付ける。植生変化が原因か、集落立地も伝統的な山麓台地上のほか、低地へも進出するなど多様化する。遺物では、装飾豊かな土製耳飾や石製垂飾などの装身具、土版や岩版などの呪術具が増加する。注目されるのは、石鏃の爆発的増加である。狩猟具の石鏃増加は、気候寒冷化に伴う獲物の減少とは反比例な関係で、背景として、戦闘用具と考える研究者もいる。縄文時代晩期は、安定した社会ではなく、混沌とした社会状況であったことが垣間見える。

-
- 【前橋の遺跡】 ①安通・洞遺跡 ②西新井遺跡
 - 【高崎の遺跡】 ③大和田遺跡 ④三ノ倉落合遺跡 ⑤中里見遺跡群

前橋市の遺跡

安通・洞遺跡 (あんづう・ほらいせき)

前橋市粕川町、粕川扇状地の標高300mに所在し、比較的高所の立地が特徴。昭和54年に粕川村教育委員会(安通・洞遺跡第1～第3地点)、平成24年に前橋市教育委員会(安通・洞No.2遺跡)により発掘調査が行われ、晩期の住居、後期後半～晩期初頭の石組状遺構と埋むぎの礎、後・晩期の遺物包含層などが確認された。遺物包含層からは、土器や石鏃のほか土製耳飾・土製垂飾具・石製玉類等の装身具、土版・岩版・石棒などの呪術具等、晩期の特徴を示す遺物が多く出土した。



発掘調査場所

大和田遺跡 (おおわだいせき)

榛名山南麓台地上に位置する。縄文時代晩期後半、浮線文をもつ土偶の腕及び腰から脚部にかけての破片が出土した。土偶は縄文時代終焉とともに激減するため、極めて稀な例である。また、土偶出土地点すぐ南で、弥生時代前期とされる土器を伴う土坑と焼土痕跡各1ヶ所、さらに小さな穴が多数みられた。小さな穴は、焼土痕跡をめぐるように径9mほどの範囲にまとまり、不明確ながら住居の存在が想定される。当遺跡では、類例の乏しい弥生時代前期住居の可能性が示されるとともに、いまだ土偶を用いた祭祀がおこなわれていた可能性が示された。

三ノ倉落合遺跡 (さんのくらおちあいせき)

榛名山南麓、烏川左岸の低位段丘面に位置。縄文時代晩期後半の遺物包含層が調査された。出土土器の多くは、浮線文が特徴の「浮線文土器」で、関東地方では桐生市千網谷戸遺跡資料に基づく千網式土器が主流である。一方、三ノ倉落合遺跡の土器は、中部・東海東部地方に多い、長野県小諸市氷遺跡資料に基づく氷式土器に文様が似ることが指摘される。氷式土器は、東海地方発祥の弥生時代前期「条痕文土器」と関係が強く、当地域は、中部地方からの玄関口ともいえる地理環境から、赤城・榛名山麓に暮らす人びとの中ではいち早く「弥生文化」にふれていたのであろう。

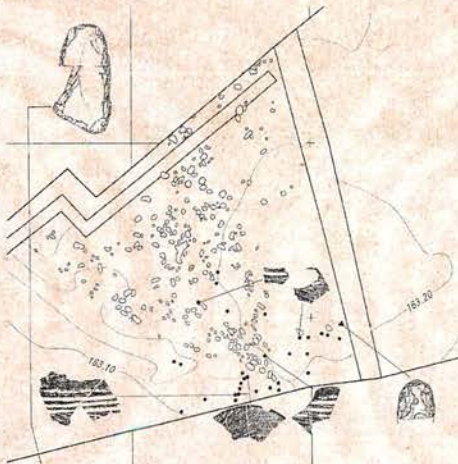


三ノ倉落合遺跡出土土器

高崎市の遺跡

中里見遺跡群 (なかさとみせきぐん)

榛名山南西麓を流れる烏川右岸に位置する。中川遺跡と根岸遺跡では低位段丘面を中心に、縄文時代晩期後半の遺物包含層が調査された。遺物包含層は、廃棄された土器・石器類などからなる。出土したのは浮線文を特徴とする土器群で、関東地方の千網式土器と中部地方の氷式土器、両者の影響が認められる。石器類では、大型の打製石斧などが出土した。中川遺跡では、河川氾濫による「礫群」下から、弥生時代前期から中期前半の遺物を伴い、水田面を歩いたような痕跡が見られ、縄文時代晩期から弥生時代のはじめにかけ、当地域の人々が山間の低地で水稲耕作を試行していた可能性を示すものである。



中里見中川遺跡弥生時代前期土器出土地点及び足跡状痕跡



第2章 弥生時代前期から中期中葉

— 山間に点在する墓・未だ見つからないムラ跡 —

すいとうのうこう

水稻農耕は日本列島ほぼ全域に伝播していくが、県内の弥生時代水田確認例は中期後半を遡らな

い。前期から中期中葉の遺跡は、主に山間部や台地上に分布し、壺や甕を埋めた再葬墓が多い。再葬墓とは、一度埋葬した遺体を、一定期間経た後、遺骨を大型の壺などに収め、特定場所に「再葬」する風習で、縄文時代後期にはじまり、東日本各地にひろがる。県内では、藤岡市の沖II遺跡や東吾妻町の岩櫃山・鷹の巣岩陰遺跡がよく知られる。では、再葬墓に埋葬された人々はどこに住んでいたのだろうか？

榛名山南麓の烏川流域などで、わずかながら住居や水田の可能性を示す資料がみられる。山間部の台地や河岸段丘面は、縄文時代の遺跡が多い場所でもある。このことから、西日本で水稻農耕が定着する頃、当地域の人々は、縄文時代とさほど変わらない生活をしていて、居住地近くの低湿地で稲作を試行していたのであろう。生活の舞台を広大な平野へと移すのは、まだしばらく後のことだった。

【高崎の遺跡】

- ④上ノ久保遺跡
- ⑤水沼寺沢遺跡
- ⑥大和田遺跡
- ⑦下室田宮谷戸遺跡
- ⑧中里見遺跡群
- ⑨中善地遺跡
- ⑩渡田荒神前遺跡
- ⑪下里見中原遺跡
- ⑫長根安坪遺跡
- ⑬神保富士塚遺跡
- ⑭神保植松遺跡

【前橋の遺跡】

- ①大胡金丸遺跡
- ②田中田遺跡
- ③元総社明神遺跡



前橋市の遺跡

赤城山南麓地域では遺跡は非常に少なく、生活の様相を把握できていない。前橋市金丸町の大胡金丸遺跡は中期前半の再葬墓とされ、前橋市富士見町横室の田中田遺跡や前橋市元総社町の元総社明神遺跡では中期前半の土器が出土したが、両者とも遺構の検出はない。該期の住居発見例として貴重な安中市注連引原遺跡例では、住居は掘り込みの浅い竪穴式ないし平地式で、平面形は一辺3.5mほどの不正方形をなし、中央に地床炉を設ける。赤城山南麓地域のみならず、県内で該期集落が判然としないのは、発見しにくい住居形態や、長期間定住する人口が少ないなどの可能性が考えられる。いずれにせよ、この時期は、安定した定着集落形成に至っていなかったようだ。



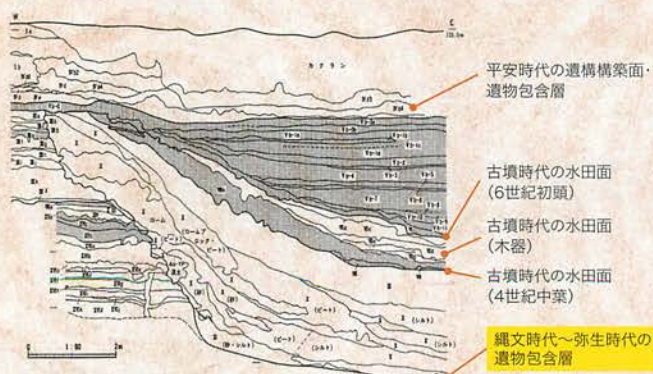
注連引原II遺跡Y-1号住居址
(安中市教育委員会「注連引原II遺跡」(1988)より)

大胡金丸遺跡 (おおごかなまるいせき)

赤城山南麓、標高約420mに位置する。壺4点・甕3点・小型鉢1点・小型台付土器1点など出土。東吾妻町岩櫃山・鷹の巣遺跡資料に類似し、いずれも中期前半と考えられる。耕作中の発見で、正確な出土状態は判然としないが、壺や甕中心の土器が狭い範囲からまとまって出土したことから、本遺跡は再葬墓であると考えられる。

元総社明神遺跡 (もとそうじゃみょうじんいせき)

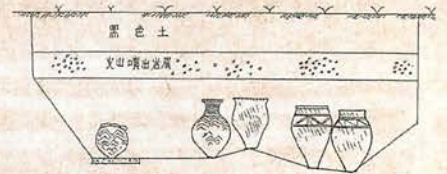
前橋台地西部、牛池川流域に位置し、付近に総社神社が鎮座する。縄文時代早期～晩期・弥生時代中期前半・後期の遺物が、最下層の総社砂層直上の砂層でみられた。縄文時代晩期～弥生時代の土器には磨滅が認められず、当地での使用を示す。南側に隣接する元総社寺田遺跡では、縄文時代晩期終末の土器が出土し、周辺に縄文時代晩期～弥生時代中期前半にかけての生活域の存在が推測される。



元総社明神遺跡の土層堆積状況

高崎市の遺跡

榛名山西麓～南麓の烏川流域で再葬墓が散見される。上ノ久保遺跡(倉淵町)では、前期後半の壺・甕6点が直立状態で埋められ、下室田宮谷戸遺跡(下室田町)では、中期中葉の壺・甕が出土した。また、水沼寺沢遺跡(倉淵町)では、前期末葉～中期初頭の大型壺が調査され、「小児棺墓」と想定された。一方、烏川支流の鑄川上位段丘面では、吉井町の神保富士塚・植松遺跡や長根安坪遺跡で中期中葉の土坑群が調査され、神保富士塚遺跡では、土坑の環状配列がみられた。各土坑からは主に土器破片が出土し、再葬墓とは異なる。墓以外では、中里見中原遺跡(中里見町)で、床状硬化面から中期中葉の住居が想定され、中里見中川遺跡では、烏川沿いの低地で、前期～中期前半の遺物をともない、水田の可能性を示す歩行跡が発見された。



上ノ久保遺跡土器出土状態

土器の変化

縄文時代は深鉢が万能な用途を担ったが、弥生時代は、米などを長期間貯蔵する「壺」、煮炊き用の「甕」、供物などを盛る器(盛器・祭器)の「高杯」、三つの器種が登場した。壺は祭器として「葬送儀礼」にも使われ、東日本の前・中期では、再葬墓から多く出土する。前期後半の上ノ久保遺跡資料は、甕に浮線文などから変化した「三角形連繫文」が施され、前時代の伝統が残る一方、弥生文化先進地の東海地方西部を発祥とする「条痕文土器」の壺が伴い、「沖式土器」と呼ばれる。中期中葉では、縄文時代の磨消縄文と通じる文様を多用する土器群がみられ、「神保富士塚式土器」が提唱された。中期中葉までの土器は縄文時代の伝統が残り、「緩やかな時代の変化」が窺われる。一方、中期後半以降の土器は「櫛插文」が主役となり、当地域の弥生文化が新たな段階へと進んだことが示される。



第3章 弥生時代中期後半

— 広大な平野を拓く・利根川の東と西 —

弥生時代の中頃、長野県北部を中心に櫛描文を特徴とする新たな土器様式(栗林式)を持つ集団が現れた。この集団はこれまでの縄文的な文化とは連続せず、弥生系磨製石器の生産と供給、木棺墓の使用など、新しい要素が見られ、社会的成熟が達成された集団であった。近年、西日本系の青銅器をもちいたマツリが行われていたことも指摘されている。群馬に移った彼らは高度な農耕技術を持ち、今まで利用されなかった低地や谷地に進出し水田を開いた。群馬では竜見町式と呼ばれる土器を有するこの集団により、本格的な農耕がもたらされた。

竜見町式の土器は榛名山麓中心に分布するが、一方、赤城山麓では異なる様相が見られ、南関東系、東関東系、南東北系の土器縄文を施す在地系土器など様々な土器が見つかる。



前橋市の遺跡

本地域は、榛名山麓地域や前橋台地と比べ、中期後半の遺跡数は少ない。しかし、荒口前原遺跡に代表される特徴的な土器群が確認された。粕川町深津の西迎遺跡は、中期後半の堅穴住居が15棟検出され、長野県地方の影響を受けた櫛描文を持つ竜見町式土器と東北地方の影響を受けた細描沈線による渦文や平行斜行線文などを持つ土器が混在する土器群が出土した。また、荒口前原遺跡の調査以降、荒砥前原遺跡などで同様な特徴を持つ土器群が検出され、更にそれら土器群に縄文を主文様とした土器群が伴うという特徴的な資料が検出されている。このことは、赤城山麓地域で、後続する後期の特徴的な土器である赤井戸式土器へとつながる土器群である可能性があり、その出自について解明が待たれる。

清里庚申塚遺跡 (きよさとこうしんつかいせき)

前橋台地と西の榛名山麓との境界部分に立地。昭和54年に発掘調査され、中期後半の環壕集落であることが明らかにされた。集落の周りを直径150m以上の範囲で、幅2m、深さ0.8m程の断面V字形の壕が取り囲むことがわかり、濠は拡張や修復が行われたことがわかった。また、環壕内側から21棟の堅穴住居が検出され、長野県地方の櫛描文土器の強い影響を受けた土器群が検出された。



西迎遺跡 (にしむかえいせき)・富田宮下遺跡 (とみたみやしたいせき)

赤城山麓の丘陵性台地南端に位置。長野県地方の櫛描文土器と南東北地方の土器、それに縄文を主文様とした土器が一つの住居から出土した。西迎遺跡は、昭和60年に発掘調査され、中期後半の堅穴住居15軒が検出された。内、13号住居は長辺11m、短辺7mという大型堅穴住居であった。一方、富田宮下遺跡は、昭和55年と平成11年に発掘調査された。弥生時代の堅穴住居は14軒が検出され、内3軒が中期後半に位置付けられる。



13号住居全景 13号住居埋甕出土状況 13号住居遺物出土状況

高崎市の遺跡

墓制

中期後半以降、方形周溝墓がみられる。墓の4方向を溝で囲み、盛り土を築いて埋葬する方法で、前期に近畿地方で現れ、中期中ごろ関東地方に伝わったと考えられる。高崎市三の丸遺跡では、中期後半頃の方形周溝墓が確認され、一辺15mほどの正方形で四隅が土橋状に掘り残される。なお、全ての人が方形周溝墓に埋葬される訳ではなく、身分・地位などで埋葬方法が異なり、地面に穴を掘って埋葬した墓壇や土器の中に遺骸を埋葬する土器棺墓もみられた。矢島竹之内遺跡では、中期末とされる墓壇が確認された。なお、再葬墓では集落との関係が不明瞭だが、この頃の墓は、安定した定住集落の近くに造られる。



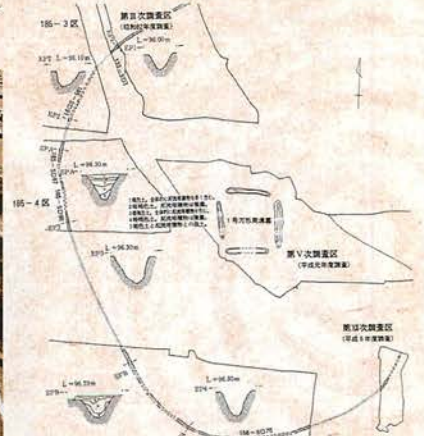
高崎城遺跡 1号方形周溝墓 矢島竹之内遺跡 13号土坑

集落

このころの大型集落の特徴として、周りを濠で囲う環濠集落がある。高崎城遺跡では方形周溝墓を中心に配置した環濠が見つかり、この周辺では烏川の東側に同時期の集落が展開している。烏川を見渡す高台から東側には広大な湿地が広がり、水田として利用していたのだろう。しかし、この集落域は長く続かなかった。一方、井野川流域や榛名山麓扇状地では大八木伊勢廻遺跡、浜尻遺跡、新保遺跡などが形成される。この地域は井野川の支流が作った小さな谷や湧水を利用して水田を営んだと考えられている。ここでは弥生後期になると遺跡がいつそう充実し



高崎城遺跡のV字型に掘られた環濠



高崎城遺跡の環濠および方形周溝墓

継続する。

第4章 弥生時代後期

—「弥生文化」の成熟・樽式土器文化圏—

弥生時代後期の群馬県西部から北部にかけては、櫛描文を多用する樽式土器が展開する。長野県内の箱清水式土器とは似ているが、独自の文化圏へと発展する。樽式土器を持つ集団は、台地上に展開する傾向があり、その周辺の谷に水田を営んでいた。広い低湿地まで進出しなかったのは、大規模な水利制御を行う集団の連携、結合までは至らなかったためと思われる。後期後半段階になると長野県域との交流は再び回復し、そして最終末になると、群馬に外部から別の集団が流入した。埼玉県側から縄文を施す吉ヶ谷式土器の分布が、碓氷川流域から赤城南麓にかけて広く見られるようになる。群馬県内では赤井戸式と呼ばれるこの土器群の流入を序章として、弥生から古墳時代への変化がはじまってゆく。



前橋市の遺跡

この頃多く使われたのは樽式土器だが、やがて埼玉県中部で出現した「吉ヶ谷式土器」が流入する。赤城山南麓では吉ヶ谷式系統の土器が多く、特に「赤井戸式土器」と呼ばれる。赤井戸式土器を使った人々の集落は、前橋市では城南地区や粕川地区で確認され、主なものとして堤頭遺跡や西原遺跡が知られる。堤頭遺跡は竪穴住居13軒が検出され、良好な一括資料が出土した。西原遺跡は集落の周囲に環濠が確認された。周辺の関後遺跡や三ヶ尻西遺跡では、同時期の水田が確認された。水田は集落近くの水はけの良い谷地に営まれる。前橋台地では4世紀代に入ると大型前方後円墳が築造されるが、赤城山南麓では古墳の出現が遅れることから、この地は決して良好な生産域とは言えなかったようである。

堤頭遺跡 (つつみがしらいせき)・関後遺跡 (せきこいせき)

堤頭遺跡は、粕川扇状地面に残された赤城山南麓の丘陵性台地南端部に立地。1979年、ほ場整備にともなう発掘調査で竪穴住居が13軒確認され、赤井戸式土器の変遷がうかがえるなど良好な資料を得た。関後遺跡は堤頭遺跡東約500m、蔵沢川右岸に立地。浅間C軽石によって埋没した水田を確認した。



堤頭遺跡 関後遺跡浅間C軽石下水田

西原遺跡 (にしはらいせき)

赤城山南麓の丘陵性台地の末端部に立地。1979年と1985年の工場建設とほ場整備にともない発掘調査を実施した。後期後半～古墳時代初頭の環濠をもつ集落とされる。環濠は上幅2m、底幅1m、深さ0.8mで、東西約120m、南北約110mの範囲を楕円形に囲み、出入口となる渡りの部分を2ヶ所設けていた。なお、環濠内に20軒以上の竪穴住居が存在し、うち5軒の調査では、赤井戸式土器終末期頃の土器が出土した。



西原環濠集落

水田

群馬県において確実に弥生時代の水田であるといえる遺跡は、実は数が少ない。高崎市並榎北遺跡では、洪水層の下から弥生時代中期後半の土器とともに水田遺構が発見された。幅5～8mの水路には堰や分水路も設置され、水利に関して一定の技術が見られる。水田耕作には木製農具が使用されたと考えられる。高崎市新保遺跡、新保田中村前遺跡で発見された大溝からは弥生～古墳時代の2000点におよぶ木製品が出土している。木製品の供給を中心とした、物流拠点的な集落であったかもしれない。

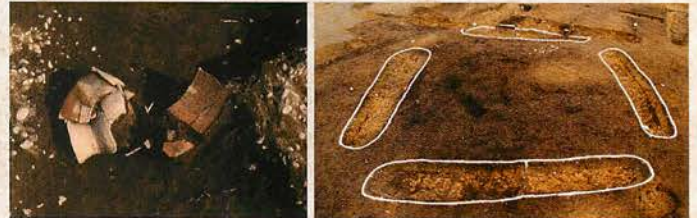


並榎北遺跡の水田・水路

高崎市の遺跡

墓制

後期の墓制は、中期後半から引き続き方形周溝墓や墓墳である。このほか、円形の溝を廻らした円形周溝墓や木棺(埋葬施設)を礎で囲む礎床墓が出現する。なお、礎床墓は周溝墓の埋葬施設としても使われた。高崎情報団地1遺跡では後期の方形周溝墓を7基確認した。八幡遺跡では居住域とは別に、礎床墓(推定)・墓墳が領域をなすこと確認され、日高遺跡で居住域・水田域・墓域の各領域の併存が確認されたことはよく知られる。



八幡遺跡1号礎床墓

高崎情報団地遺跡 2号方形周溝墓

集落

後期は、染谷川や井野川水系、烏川左岸など河川流域で集落増加がみられる。中期から続く新保遺跡群、中期末頃から出現する日高遺跡・熊野堂遺跡群・鈴ノ宮遺跡群・上並榎南遺跡・巾遺跡・高崎城遺跡のほか、後期では新たに小八木遺跡・矢島竹之内遺跡・高崎情報団地遺跡群・高関堰村遺跡群・引間遺跡群などの集落が出現する。このうち、新保遺跡群・日高遺跡・熊野堂遺跡群・鈴ノ宮遺跡群・引間遺跡群は古墳時代まで集落を存続させる。後期後半、標高110m以上の台地・丘陵部で、剣崎遺跡・八幡遺跡・乗附遺跡などで集落が出現し、社会の動乱が起因とされる高地性集落として理解される。

■ 弥生時代後期集落の存続期間

立地	遺跡名	中期	後期	古墳
天王川・染谷川水系	新保遺跡群	■ ■ ■ ■ ■		
	小八木遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
	日高遺跡	■ ■ ■ ■ ■		
井野川水系	熊野堂遺跡群		■ ■ ■ ■ ■	
	鈴ノ宮遺跡群		■ ■ ■ ■ ■	
	矢島竹之内遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
烏川左岸	高崎情報団地遺跡群		■ ■ ■ ■ ■	
	上並榎南遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
	巾遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
その他の水系	高崎城遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
	高関堰村遺跡		■ ■ ■ ■ ■	
台地・丘陵部	引間遺跡群		■ ■ ■ ■ ■	
	剣崎遺跡			■ ■ ■ ■ ■
	八幡遺跡群		■ ■ ■ ■ ■	
	乗附遺跡		■ ■ ■ ■ ■	

日高遺跡(国指定史跡)の発掘調査

日高遺跡は高崎市日高町から中尾町にあり、昭和152年～53年に関越自動車道建設に伴い発掘調査が実施され、東日本ではまれな弥生時代水田発見として全国的に注目された。その後、後期の集落跡などが確認された。その結果、生産域・居住域・墓域がまとまって保存された重要遺跡として、平成元年に国の史跡に指定された。日高遺跡では、後期前半から低地部の水田開発、台地部の集落・墓域の形成が始まり、後期後半になると集落を囲う環濠が掘られた。環濠は深さが1.7m～1.8m、幅が3.5～4.0m程度と推定され、全長約400mに及ぶ。内側に土塁を伴うと考えられることから防衛的な意味も想定される。

日高遺跡(国指定史跡)の整備

平成5年度～20年度、遺跡を貴重な文化遺産として保存・活用するための史跡整備目的の発掘調査を行った。調査成果に基づき、環濠集落、水田、円形周溝墓などを復元し、弥生時代のムラを体感できる公園を目指し、平成21年度より史跡整備工事に着手した。平成27年度までに一部開園を計画している。



環濠



日高遺跡全体図

第5章 古墳時代初頭

— 文様を失う土器・古墳時代の始まり —

一般的に、古墳時代は、3世紀中頃あるいは後半、墳丘全長286mの箸墓古墳(奈良県桜井市)の築造に始まるとされる。この頃、上野西部では、櫛描文で飾られた弥生土器(樽式土器)を包摂するように、東海地方西部系の土器が大量に流入し、新たに前方後方形周溝墓がもたらされた。そして、高崎市東部から前橋市南部の広大で肥沃な原野に移住し、開発に成功した最初の長により、大型古墳が築かれた。前橋市域の八幡山古墳・前橋天神山古墳、高崎市域の元島名將軍塚古墳である。

【高崎の遺跡】

- ⑦元島名將軍塚古墳
- ⑧元島名遺跡
- ⑨矢中村東遺跡
- ⑩高崎情報団地II遺跡
- ⑪宿大類村西遺跡
- ⑫貝沢柳町遺跡
- ⑬保渡田荒神前遺跡
- ⑭豊岡後原遺跡
- ⑮引間遺跡

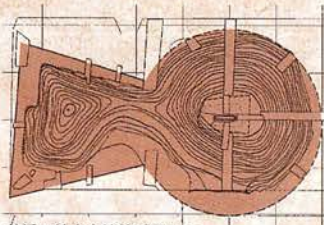
【前橋の遺跡】

- ①前橋天神山古墳
- ②八幡山古墳
- ③公田東遺跡
- ④富田大泉坊A遺跡
- ⑤内掘遺跡
- ⑥三日尻西遺跡

前橋市の遺跡

前橋天神山古墳(まえばてしんじんやまこふん)・
公田東遺跡(くでんひがしいせき)

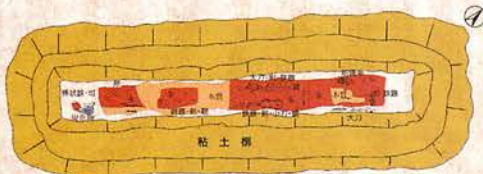
3世紀半ばごろには近畿の邪馬台国を中心に瀬戸内、九州北部まで広がる政治連合が存在していた。一方、滋賀県から北陸、関東まで含む政治連合もあり、その盟主は濃尾平野を中心に展開した狗奴国があった。邪馬台国連合は前方後円墳形、狗奴国連合は前方後方墳形の古墳を共有していた。この国内統合の最終段階として両者の衝突があった。後の歴史からみると和平という形で近畿を中心とする邪馬台国連合に狗奴国連合が加わり、ヤマト王権が成立した。前橋市の朝倉・広瀬古墳群には4世紀初頭に130mの前方後方墳である八幡山古墳、続く4世紀前半には129mの前方後円墳である前橋天神山古墳が相ついで築造される。東日本の古墳築造は前方後方墳から前方後円墳に変化する傾向があり、それはヤマト王権の成立に係っている。この2つの古墳の存在から東日本の勢力がヤマト王権に参入したことを示す典型例といえる。また、公田東遺跡は大型の首長墳のもとで水田の開発を直接担った農民たちの墓は、水田地帯に点在する村落の隣に造られた。公田東遺跡は、県道長瀨バイパスの調査で発掘され朝倉・広瀬古墳群の南西3kmにある。発掘された墓の中から鶏形土製品が出土した1号墓は前方後方形の大きな周溝墓であることから村オサの墓と思われた。



前橋天神山古墳墳丘図 99m



五神四獣鏡

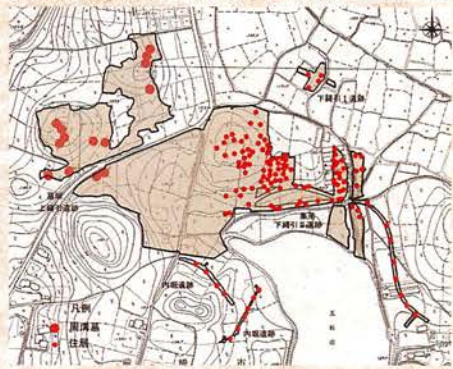


天神山粘土柳図面

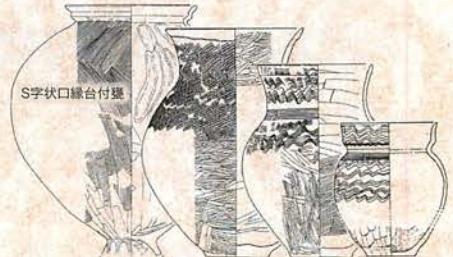
集落

内掘遺跡群(うちぼりいせきぐん)

上縄引遺跡と下縄引I・II遺跡は、墓域・集落として関連し、前橋市大室公園北部、標高137m前後の丘陵性台地に浅い谷をはさんで存在する。下縄引I・II遺跡の集落は東西200m、南北100m、住居約200軒の存在が想定され、うち100軒強が調査された。上縄引遺跡では円形周溝墓10基、方形周溝墓3基、前方後方形周溝墓1基が検出された。なお、生産域は谷あいを開けた北側の桂川・神沢川流域の沖積地に求められる。両遺跡の出土土器群は、赤井戸式・樽式系を主体としS字状口縁台付甕を組成にもつ石田川式土器で構成され、多様な外来系土器群を含む。石田川式土器が少ないのは、時期的な問題あるいは地域性に起因したものであろう。外来系土器群は、①東北地方の天王山系、②東関東の十王台系、③赤井戸式と樽式系の2つの文様が施文されたもの、④南関東系、⑤房総あるいは東海の菊川式、⑥東海系の大廓式、⑦北陸地方の月影式、⑧東海系の廻間式、⑨関西地方布留式土器に系譜が求められる。



内掘遺跡群の墓域と集落



内掘遺跡群 主な出土土器

水田

赤城山南麓地域では、三ヶ尻西遺跡(粕川町)で、浅間C軽石に埋もれた水田で小河川(東神沢川)から引きこんだ小規模な水路が検出され、赤井戸式土器が出土した。富田大泉坊A遺跡では、4面にわたり水田面と水路が検出され、このうち第4面とされる弥生時代後期の確認面で、上幅1m、深さも0.7mを超す比較的規模の大きい水路が検出され、途中に堰状の遺構も検出された。なお、水路埋土中で樽式土器や赤井戸式土器が出土した。一方、前橋台地の徳丸仲田遺跡で、古墳時代前期とされる上幅3m、深さ1m以上の大溝が確認され、周辺調査例を含めると、南北10kmを越える長さとなる。この大溝は、水田がある低地と集落がある微高地との境に掘削され、用排兼用の溝と考えられる。前橋台地は、前橋天神山古墳や八幡山古墳が造営され、弥生時代終末期から古墳時代前期における最重要地域とされ、大規模な開発が行われたことが考えられる。

トピックス

他の地域から運ばれた土器

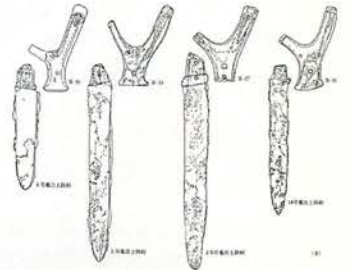
群馬県の弥生時代は、北九州を起源とする遠賀川式土器や東海地方の条痕文系土器が水田稲作農耕の技術と共に伝えられることより始まる。中期には、長野県の中部高地型櫛描文をもつ土器や南東北地方の土器が入る。後期には、長野県の櫛描き波状文をもち、朱く塗られる土器が入ってくる。そして、終末期～古墳時代前期には、東関東地方の土器、南東北地方の土器、東海地方の土器、北陸の土器、新潟の土器など様々な土器が入る。

装身具

弥生時代の装身具は、縄文時代以来の呪術的性格とは別に、威信財としての役割も担うようになる。新保田中村前遺跡からはガラス玉や鹿角製簪(かんざし)が発見された。新保遺跡では巴型銅器を転用した垂れ飾り、八幡遺跡からは、青銅製の腕輪や管玉が出土している。

金属の道具

弥生時代を通じ、青銅器・鉄器は極めて貴重品で、流通は限られ、県内では、ようやく後期にみられるようになる。高崎市域では高崎情報団地遺跡・八幡遺跡から鉄剣、新保遺跡から鉄剣と思われる鉄片、銅製釧が出土した。なお、新保遺跡・新保田中村前遺跡から出土した木製品の加工には鉄器が使用されたようである。また、新保田中村前遺跡から鹿角製の鉄剣柄頭が出土し、渋川市有馬遺跡出土の鉄剣の穴と柄頭の穴が一致した。この柄頭は奈良県唐古遺跡や静岡県登呂遺跡で発見され、同規格の鉄剣が広範囲に流通したことを物語る。



有馬遺跡出土鉄剣(下)と新保田中村前遺跡出土鹿角製柄頭(上)の装着思案図

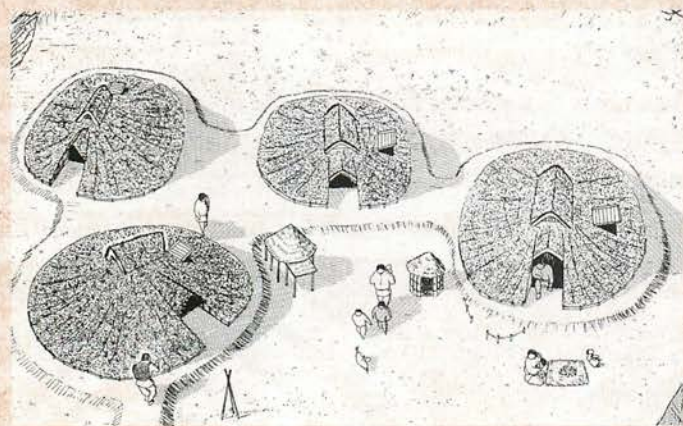
高崎市の遺跡

墓制

東海地方西部を起源とする前方後方形周溝墓や前方後方墳が、上野西部に波及し、大型前方後方墳(100mクラス)→前方後方形周溝墓(10~50m)→方形周溝墓(10~30m)と、ある程度の階層差を反映した墓制が成立する。方形周溝墓から出土する土器も、東海地方西部系を中心として北陸系も出土するなど、様々な外来要素を含み、墓制が成立したとみられる。新たな墓制を象徴する大型古墳が、元島名町井野川左岸の元島名将軍塚古墳で、全長95mの2段の築成である。1911年(明治44)に後方部の中心で粘土櫛が確認され、石釧1、獣形鏡1が発見された。また昭和55年の調査で、墳丘より転落したとされる土器群などが出土した。

集落

高崎市保渡田町の保渡田荒神前遺跡では、古墳時代初頭の浅間山噴火による軽石層(As-C)に覆われた集落が確認された。軽石などで良好に保存されたため、通常は後世の耕作などで失われてしまう竪穴住居周囲の盛土や、平地建物などが確認された。調査の結果、土屋根式の竪穴住居が4軒、作業小屋の役割を想定した平地建物2軒をとともなう景観が復元された。こうした竪穴住居群と平地建物を単位とした集落があり、周囲には畠や水田が広がっていたのだろう。



保渡田荒神前遺跡集落景観推定図

水田

古墳時代初頭、浅間山が大噴火し、噴出した軽石(浅間C軽石)は県内を広く覆った。この軽石の下から古墳時代初頭の水田遺跡が数多く発見されている。この頃の水田は、水を制御しやすい谷地だけでなく平坦な場所にも分布し、広域に造成されていた。古墳時代社会の到来により大型の古墳を築いた首長が大量の労働力を統制できた結果である。高崎情報団地遺跡では、井野川右岸の微高地に約400mにわたる溝が見つかった。溝の中からは浅間C軽石とともに大量の土器が出土した。榛名山麓の小河川を利用して周囲に水を引く水路と考えられている。



高崎情報団地遺跡の水路



高崎情報団地遺跡の水路より出土した土器

前橋会場

入場無料

2014.1.8[水]→1.14[火] 午前9時~午後6時
前橋プラザ元気21 1階 にぎわいホール
群馬県前橋市本町2丁目12-1

■お問い合わせ先
前橋市教育委員会文化財保護課 TEL 027-231-9531

高崎会場

入場無料

2014.1.18[土]→1.27[月] 午前9時~午後6時
高崎シティギャラリー 2階 第6展示室
群馬県高崎市高松町35-1

■お問い合わせ先
高崎市教育委員会文化財保護課 TEL 027-321-1292